

特集 これからのレッドデータブックー地域の生物多様性保全のツールとしてー

## 「生物多様性とくしま戦略」の策定と推進にむけた協働

徳島大学環境防災研究センター・生物多様性とくしま会議 鎌田 磨人

Collaborative works for establishing and implementing the biodiversity strategy of Tokushima. Mahito Kamada (*Research Center for Management of Disaster and Environment, The University of Tokushima and Civic Council for the Biodiversity of Tokushima*).

### はじめに

日本の地方自治体では、生物多様性地域戦略の策定が進みつつある<sup>1)</sup>。2012年4月現在、生物多様性地域戦略およびそれに準じる計画が策定済みの都道県は18、策定中の府県は13となっている。自治体の基本方針として位置づけられるこの戦略は、自然環境保全のために活動している市民、また、生物多様性・生態系の保全に関わる仕事をしている研究者にとって、とても大事な意味を持つ。あるいは、意味を持つものになければならない。

徳島県の地域戦略である「生物多様性とくしま戦略（以下、とくしま戦略）」は、徳島県内で活動してきている市民団体が緩やかに結びつくことによって組織された「生物多様性とくしま会議（以下、とくしま会議）」を核として、徳島県、大学等の多様なセクターの連携・協働によって策定されつつある。そうした連携・協働は市民の活発な活動を支え、生物多様性の保全および持続可能な利用に対して具体的な効果が期待されること、市民参加の増加によって事業効果が向上し、同様の活動が全国的に広がっていくことが期待されることから、「国連生物多様性の10年日本委員会」の連携事業として認定されている（URL：<http://undb.jp/activity/accredited.html> および [http://undb.jp/pdf/activity/accredited\\_09.pdf](http://undb.jp/pdf/activity/accredited_09.pdf) 2012.11参照）。

本報告では、そのユニークな過程と、それぞれのセクターの役割について紹介する。

### 連携・協働の枠組み

#### 生物多様性とくしま会議

とくしま会議は、徳島県内で活動している18の市民団体、および研究者の連携によって、2010年6月に設立された（現在の参加は22団体、表1）（URL：<http://tokushima-kaigi.aicon-tokushima.co.jp/index.php?FrontPage> 2012.11参照）。規約には、その目的として、「徳島における生物多様性地域戦略の策定に関しての提言を行い、策定後の推進を担い、相互評価をしつつ、戦略を見直し、より発展的展開を目指す」ことが掲げられている。ここで表明されているのは、地域戦略のあり方についての提案にとどまらず、策定後の戦略推進や評価の実施についても、地域社会の一員としてPDCAサイクルをまわしていくための責任と役割を担っていこうとする、市民団体の意思である。

自主的・自立的運営のもと、3部会（奥山・里山部会、まち・里部会、川・海・汽水域部会）で構成されてきたとくしま会議は、オブザーバー参加の徳島県担当者も含めた毎月1回の全体ワーク

ショップ（以下、WS）が行われている。それに加え、部会会議も随時開催して、2011年4月に「徳島県での生物多様性地域戦略策定に向けての提案（以下、提案）」をとりまとめた。そして6月に、提案書を知事に手渡した（日本自然保護協会、2012）（図1）。

この間の活動資金は、とくしま会議の構成団体の一つ（NPO徳島共生塾一步会）が「協働推進モデル創出事業」として徳島県から得た助成金（20万円程度）と、参加団体や個人からの協賛金（5,000円・1団体）が全てであった。とくしま会議の立ち上げから提案づくりに至るWSは、高い技術を持つファシリテーターをとくしま会議外から招いて実施された。その経費もこの資金から捻出され、ファシリテーターもおおよそ経費には見合わない少額で請け負ってくれた。

表1. 生物多様性ととくしま会議を構成する市民団体。

---

<奥山・里山部会>
エコロジーの森を創る会
かみかつ里山倶楽部
NPO法人 剣山クラブ
徳島県自然保護協会
NPO法人 三嶺の自然を守る会
<まち・里部会>
NPO法人 里山の風景をつくる会
園瀬川流域環境保全の会
日本ビオトープ管理士会徳島支部
NPO法人 徳島共生塾一步会
ピース
<川・海・汽水域部会>
沖洲海浜楽しむ会
NPO法人 カイフネイチャーネットワーク
川塾
NPO法人 元気やまかわネットワーク
市民アクション徳島
とくしま自然観察の会
日本野鳥の会徳島
吉野川ひがたの会
吉野川ラムサルネットワーク
<マネジメント>
NPO法人 徳島保全生物学研究会
<未所属>
徳島県植物研究会
NPO法人 大川原

---

毎月第1水曜日の18時45分～21時30分に徳島大学内で行われている定例WSは、現在（2012年11月）まで途切れることなく続いている（図2）。それは、事務局運営者、ファシリテーターも含め、市民の熱意のみによって支えられているといっても過言ではない（鎌田ほか、2011；日本自然保護協会、2012）。

### 徳島大学環境防災研究センター

徳島大学では、徳島大学環境防災研究センター（以下、環境防災研究センター）が中心となって、とくしま戦略の策定に係る活動をサポートしてきている。2010年度は、「生物多様性ととくしま会議」への参加および運営支援」を、2011～2012年度は「生物多様性ととくしま戦略（仮称）」の策定支援」を事業化し、学内研究者がこれら活動に業務として関われるようにされた。また、市民活動の支援および学内研究者による研究成果の活用と戦略へのインプットを目指す「徳島県“生物多様性地域戦”策定支援研究事業」が、学長裁量経費（2011～2012年、150万円）として認められた。環境防災研究センターは、徳島県内の生物多様性



図1. 生物多様性ととくしま会議によってまとめられた「徳島県での生物多様性地域戦略策定に向けての提案」は、新開代表から徳島県知事に手渡された（2011年6月9日）。

情報の収集と分析を担っている他、とくしま会議の事務局マネジメント（事務局会議が、定例WSの前週木曜日に開催されている）、とくしま会議の定例WSのサポート等を担っている。また、とくしま会議と徳島県との連携で実施されたタウンミーティング（以下、TM）に協力し、いくつかの会場でファシリテーションを行い、そして、TMを通して抽出された意見の取りまとめを担った（後述）。

### 徳島県生物多様性地域戦略検討小委員会

2011年8月2日、徳島県知事は「生物多様性とくしま戦略がいかにあるべきか」について徳島県環境審議会に諮問した。実質的な検討は、自然環境部会内に設置された「徳島県生物多様性地域戦略検討小委員会（以下、小委員会）」において行うこととされ、その小委員会では、環境審議会の外から研究者・専門家を招くことができるしくみが設けられた。この枠を使って、環境防災研究センター内の学長裁量経費研究グループを中心とする研究者やとくしま会議の事務局長が招聘された。なお、小委員会の開催・運営、とくしま戦略の取りまとめに係る事務局は、徳島県県民環境部自然環境課（以下、自然環境課）<sup>2)</sup>が担っている。



図2. 生物多様性とくしま会議の定例ワークショップ。

小委員会は、自然環境課が設置している「希少野生生物保護検討委員会」とも連携をとりながら、徳島県内の生物多様性の現状や課題に関する取りまとめと執筆を分担して行い、また、戦略や行動計画の具体的内容について検討を行なってきた。小委員会の会議開催を始めとして、とくしま戦略の策定に係る経費は、徳島県が「地域生物多様性保全活動支援事業」として環境省から獲得した助成金（2011～2012年度、総額655万円）で賄われている。

このように、とくしま戦略の策定は、自然環境課、とくしま会議、小委員会を中核とし、そして、環境防災研究センターや希少野生生物保護検討委員会等との連携のもとで進められている（図3）。

### 連携・協働の取り組み

#### タウンミーティング（TM）の実施

2011年7月以降、とくしま会議は自然環境課との連携を深め、活動を発展させた。すなわち、とくしま会議と自然環境課とを共同事務局として、県内9地域で10回のTMを開催し、地域住民から1) 保全・利活用していきたい生きもの、場所、生活の知恵、2) 保全・利活用するうえでの課題



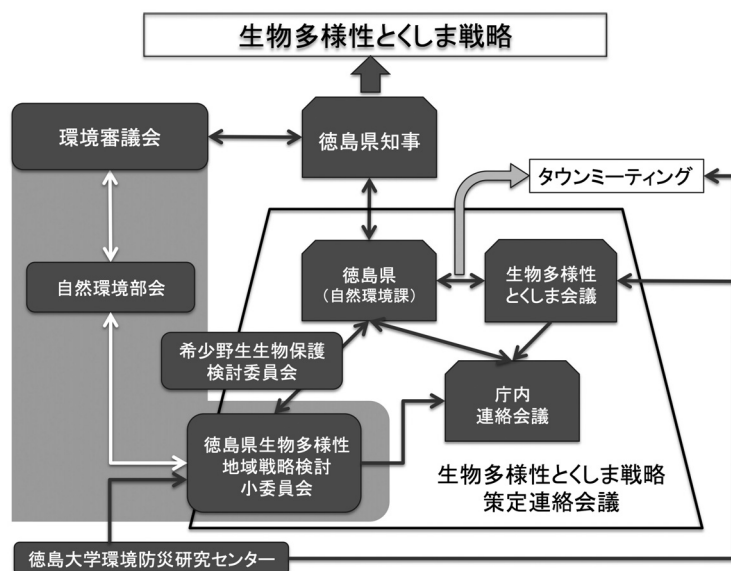


図3. 「生物多様性とくしま戦略」の策定に係るセクター間の連携（2011年8月2日の徳島県環境審議会会で配布された資料をもとに作成）。

に関する意見を抽出した（URL：<http://www.aicon-tokushima.co.jp/tm02/> 2012.11参照）。その資金は、とくしま会議の構成団体の一つ（NPO徳島保全生物学研究会）が「市民協働による生物多様性地域戦略策定に向けたタウンミーティング活動」として環境再生保全機構から獲得した地球環境基金助成金（215万円）、自然環境課が「地域生物多様性保全活動支援事業」として環境省から獲得した助成金（2011～2012年度、総額655万円のうち70万円程度）、徳島大学の学長裁量経費（総額150万円のうち50万円程度）によって賄われた。

徳島でのTMは、とくしま会議が知事に手渡した提案に盛り込んだ、「市民意見を広く地域戦略に取り入れるため、TMを実施すべき」との意見に対して、その責任を自らで果たすべく、とくしま会議によって企画・提案され、実現したものである（図4）。都道府県レベルでの生物多様性地域戦略の策定過程において、住民から広く意見を聞くためのTMを行なっているのは、私が知る限

りでは徳島県を入れて3つしかなく、実施費用の獲得も含めて、市民団体のイニシアティブでこれが運営されたのは、徳島での活動が唯一のものだろう。

TMは2部構成で行われ、第1部ではとくしま戦略策定の必要について自然環境課の担当者が、次いで、TMの狙いについてとくしま会議メンバーが情報提供を行うよう役割が分担された。第2部では、とくしま会議メンバーの運営・進行によってWSが実施され、参加者からの意見の抽出が行われた。このような、とくしま会議メンバーによるTMの企画、運営、WSでのファシリテーションが可能だったのは、とくしま会議発足からTMに至る1年間、WSを行い続けた成果である。

「市民の力で生物多様性地域戦略の提案を」という目標のもとで形成されたとくしま会議ではあるが、最初から足並みが揃っていたわけではない。活動目的や活動内容が、それぞれの団体によって異なっているからである。2010年6月からほぼ一



図4. タウンミーティング、ワークショップの進行は生物多様性とくしま会議のメンバーによって担われた。

年を費やして実施してきたWSでは、一つ一つの合意形成に時間をかけ、互いの立ち位置を知り、認めあっていくための努力が払い続けられた。それは各団体の意見や方針を“見える化”し、団体間の相違点や共通点を確認しあい、共有可能な大きな目標を創りだし、そして、信頼に基づいた協働を生み出すための過程であった（鎌田ほか、2011）。こうした経験を経ることで、とくしま会議メンバーがWSの有効性を実感し、そのしくみを理解し、WSを自らで進行する力をつけてきたのだ。

TMでは、自らをWSの運営者に転じることで、WS技術を実践に活かすことを経験した。TM終了後の意見交換会では、「TMを実施しながら様々な技術と工夫が必要であることを実感した、もっと細かな技術を学んでおくべきだった」、「TM実

施前よりも、もっと大きな責任を感じるようになった」等の感想が、とくしま会議のメンバーから聞かれた。これは、戦略づくりや、その後の遂行に対しての関与の度合い、すなわち当事者性が増したこと、また、合意形成のあり方についての理解が深化したことを示している。協働による戦略づくり、そしてTMの実施は、それ自体がツールとなって人のつながりを深め、また、意識とスキルの向上を促す。それこそが、戦略づくりを協働で行なっていくことの本質的な意味であろう。

さて、10回のTMには、延べ326名の県民が集まり、計5,331の意見が出された。その膨大な数の意見は、環境防災研究センターが学生の協力を得て電子データ化し、整理した。その結果、保全・利活用したい生物とそれらのハビタットに係る課題、生物資源の確保・維持管理・活用に関する文

化的要素の継承に係る課題、情報に係る課題、人材・啓発に係る課題、公共事業に係る課題、社会目標や価値認識に係る課題、制度・しくみに係る課題に分類され、整理された(図5)。この結果は、とくしま会議に還元され、また、小委員会にインプットされた。小委員会は、TMの結果も参照しつつ徳島県内の生物多様性や生態系の現状と課題をまとめ、そして、戦略や行動計画の骨子を事務局の自然環境課に提案してきている。

### 生物多様性とくしま戦略策定連絡会議の開催

とくしま会議がまとめた提案には、「戦略の策定を牽引する徳島県は、住民・関係者等と双方向コミュニケーションを促進する役割を果たすこと」を期待する旨が盛り込まれていた。これを受ける形で、小委員会は、とくしま会議の代表者および庁内部局・課の担当者を集めた意見交換会を、「生物多様性とくしま戦略策定連絡会議(以下、連絡会議)(図3)」として開催するよう自然環境

課に申し入れた。そして、第1回連絡会議が2012年2月24日に開催された。この連絡会議には、小委員会委員の他、とくしま会議の代表および3部会の部会長、そして庁内40課の担当者が集まった。

連絡会議では、とくしま戦略の策定に係る市民提案の内容およびTMの開催内容についてとくしま会議から報告され、次いで、とくしま会議の活動を踏まえたとくしま戦略の検討状況が小委員会から報告された。また、とくしま戦略の策定、および、その後の推進にあたっては、庁内部局・課の積極的な関与と、企業の賛同・協力が必要となることから、これらのセクターでの生物多様性への認識や具体的な取り組みについての現況を把握するためのアンケート調査を行うことが小委員会から提案された。そして、集まっていた行政担当者には庁内アンケートに対して回答するよう依頼された。

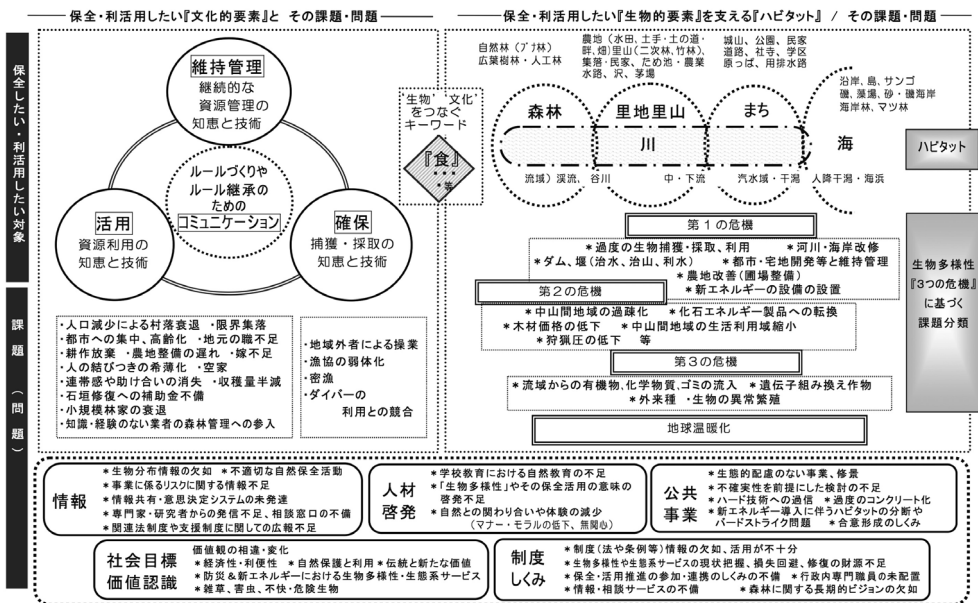


図5. タウンミーティングで抽出された意見類型.

## アンケート調査の実施

2012年3～5月に、県庁内の42課および企業に対してアンケート調査が行われた。アンケート調査票は小委員会が環境防災研究センターの助力を得ながら作成し、アンケートの配布・回収は自然環境課が担当した。集計・整理は、小委員会ととくしま会議で分担して行われた。調査および集計に係る経費は、徳島県が環境省から獲得した「地域生物多様性保全活動支援事業」が使用された。

庁内アンケートでは、生物多様性に関連する施策の現状と課題を把握することを目的とし、それぞれの課で実施されている施策（制度や事業）と生物多様性との関わり、および、生物多様性保全に係る施策を推進するためにはどのようなことが必要と考えられるかといった内容の質問がされた。その結果、「県民・地元住民の理解や賛同」、「市町村行政の理解や賛同」、「県民に向けての普及啓発の強化」、「事業の継続性の確保」、「部局間の連携による横断的取り組み」、「NPO団体・狩猟関係・警察などの協力」、「事業者の法令遵守」等が必要と考えられていることがわかった。これらの多くは、基礎自治体を始めとする地域住民の理解と協力、また、庁内での横断的な連絡・調整の必要性に係るものであった。

企業に対しては、事業所の概要、環境問題への取り組みの現状、生物多様性と事業との関係、生物多様性保全に向けた事業者としての関わり、事業所支援の具体的要望等についての質問がなされた。179企業から得た回答から、「制度・しくみ」として、情報共有のしくみ、助成金・補助金制度、事業内容との関連性を自己評価できるしくみ、企業参加のガイドライン等が、「必要な情報」として、事業内容と生物多様性との関係性の提示、県内の行政・NPO・企業等の取り組み事例の紹介等が、「セミナー・シンポジウムの内容」として、業種にあわせたセミナーや研修会の開催等が、特

に望まれている事項であることがわかった。そのため、小委員会は、企業のための生物多様性取組ガイドラインの作成や、それに基づくセミナーの実施を行動計画に盛り込むよう徳島県に提案した。

## とくしま会議による戦略策定後の 推進に向けた取り組み

### 人材育成プログラムの検討

とくしま会議では、既にとくしま戦略の策定後の具体的アクションを創りだそうとしている（とくしま戦略は、2013年3月に策定が終えられる予定）。とくしま会議が作成した提案の中では、とくしま戦略の行動計画に盛り込むべき七つの項目が提示されている<sup>3)</sup>。それらのうち行政のみでは取り組みが困難と考えられる「生物多様性保全を推進する人材の育成」、「情報の集積・共有・発信」、「地域戦略策定後のモニタリングの実施と進捗のチェック」を支援していきたいと、とくしま会議は考えている。そのため、「生物多様性ととくしま戦略の実現に向けた人材育成と情報共有の仕組みづくり事業（内閣府新しい公共支援事業・新しい公共の場作りのためのモデル事業）」として資金を獲得し（2011～2012年度、520万円）、まずは「生物多様性保全を推進する人材の育成」を中心に検討を進めることにした。

すでに述べたように、とくしま会議は22の市民団体からなるネットワーク組織であり（表1）、それぞれの団体は独自の目標のもとで、それぞれに活動を展開してきている。とくしま会議として実施すべきことは、まず、育成すべき人材像を共有すること、次に、それぞれの団体の持ち味を活かしたプログラムを開発することであった。そのため、定例WSで、求められる人材とはどのようなものかについて意見抽出を行い、共有化が図られた。また、それぞれの団体がどのような人材を

表 2. 2012年度に試行される人材育成プログラム（奥山・里山部会、まち・里部会）。

(1) 奥山・里山部会

項 目	内 容	
実施回数	4回	
募集対象者	①山の自然環境や保全に関心のある人、②平成23年度実施したTMに参加した人、③日ごろハイキングや山登りを楽しむ人	
育成を目指す人材像	山で起きている様々な問題の解消に向け、広報、啓発、モニタリングなどの活動をする人	
プログラムを通して身につくスキル	①山の動植物や生態系の基礎知識、②山の課題（オーバーユース、シカ食害）の確認と対策、③人工林を自然林に戻す意義	
プログラム参加後の活躍のイメージ	①山部会が行う広報・啓発・調査活動に参画、②山の自然保護の各種団体の活動に参加	

回	実施概要	目 標
第1回	「秋の高丸山ガイド」 実施日：9月23日 場所：勝浦郡上勝町高丸山山域 定員：20名	①山で起きている課題（オーバーユース、シカ食害等）を学ぶ、②山の生態系を学ぶ
第2回	「シカ食害の三嶺樹林帯探訪」 実施日：11月3日 場所：三好市東祖谷菅生三嶺山域 定員：20名	①剣山山系の深刻なシカ食害を理解、②樹木ガードを巻く活動を行い、シカ食害防止策を講じる
第3回	「ちょっと木を植えに行こう」 実施日：11月23日（予定） 場所：那賀郡那賀町六丁の森 定員：20名	①人工林を天然林に戻す意義を学ぶ、②伐採跡に植樹を行い自然林に戻すことへ貢献する
第4回	討論会「山の課題を解消するために」(仮称) 実施日：2月16日 場所：徳島市ふれあい健康館	①3回の活動を通じて山の課題と打開策を考える、②山部会や各団体で活動することの大切さと市民がもっと山との関わりを持つ方法を考える

<備考> 各回を通じて、実際に活動しているNGOのリアルな情報を提供するとともに、工夫をこらした市民ならではの企画で、楽しんで参加していただく。

保有しているのかについてアンケート調査を行い、その結果を整理して配布することで、団体の強みや弱みの共有化が図られた。これら資料をもとに、それぞれの団体で進められてきている活動やイベントを有機的・横断的につなぐことで、それぞれの視点や長所を活かし、また、短所を補いあえるよう部会単位で人材育成プログラムを作成し、試行することとなった。現在は、3部会それぞれでのプログラム作りが終わり、試行されているところである（表2）。

プログラム作成にあたっては、1) どのような人に参加してもらいたいのか、2) プログラムへの参加をとおして、どのようなスキルを身につけてもらいたいのか、3) プログラムに参加した人が、終了後にどのような活動をするようになって

もらいたいのか、について明確になるよう検討・共有し、事後に自己評価ができるよう努力が払われた。

何回かの試行をとおして、すでに課題も見えつつある。本年度の終了時には、プログラムを通して行なって得た成果や課題を整理・共有し、改善案をつくっていくこととなっている。そして、とくしま戦略の公布後には、徳島県との協働で人材育成を行なっていけるよう提案される予定である。将来的には、とくしま会議によって開発される人材育成プログラムが、大学等での学生教育プログラムとしても位置づけられるよう、連携のあり方を検討していくことも必要であろう。



表 2. (続)

(2) まち・里部会	
項 目	内 容
実施回数	5回
募集対象者	①食の安全に関心のある人, ②ベジタリアン, ③マクロビオティックに興味がある人, ④生物多様性を知らない人, ⑤子育て中の母親
育成を目指す人材像	①地域の自然資源や生態系サービス, 生物多様性の恵みに対する理解があり, ②他の人や地域への波及効果・影響をおよぼすことができる人
プログラムを通して身につくスキル	①地域の自然環境に対する理解の向上, ②行事食を通じて生物多様性の普及啓発の具体的な行動, アクションが起こせるようになる, ③食と生物多様性の関わりについて理解力がつく
プログラム参加後の活躍のイメージ	①生物多様性が身近になった市民が生物多様性地域戦略の策定を理解し, 行動に対して参加しやすくなっている, ②地域の自然の恵みをおいしく頂く為に, 賢い選択と何ができるか考えることができるようになる, ③生物多様性にとってよいエンドユーザーとなる, ④生物多様性が普及する原動力となる

回	実施概要	目 標
第 1 回	「行事食から七草粥へ」 実施日：10月27日（土） 場所：とくぎんトモニプラザ 講師：長尾久美子さん（徳島文理短期大学部生活学科食物専攻）	①24節季の謂われや徳島の食文化について理解が深まる, ②自然の恵みや地域の資源, 文化に気づき, 日々の暮らしの中で, よりよい選択ができるようになる
第 2 回	「食文化のルーツーいきものがいっぱい米づくり」 実施日：11月10日（土） 場所：徳島大学 日亜会館 講師：斉藤範子さん（自然農法で米作り）	①田んぼの生物多様性に気づく, ②農業に頼らない米づくりの実践を理解する, ③いのちのつながりがわかる, ④生き物とつながる暮らしを考える力がつく, ⑤お米を選ぶ基準の選択肢がひろがる
第 3 回	「七草が語る食の文化」 12月16日（日）午後2時～ 徳島大学 日亜会館 講師：未定（依頼中）	①七草がどんな所に生育しているのか知る, ②七草の薬効について理解向上, ③先人の知恵に触れる
第 4 回	「七草を探しに行こう」 実施日：2月16日（土） 場所：気延の里ビオトープ事務所 講師：中村俊之さん（[有]ウェットランド研究所）	①七草の生育環境の変化について理解する, ②七草の種類, 形の理解度アップ
第 5 回	「七草粥を作って食べよう」 日時：2月23日（土） 場所：徳島県立障害者交流プラザ 講師：篠原幸子さん（元徳島文理大学家政学部管理栄養士）	①行事食からみた生物多様性について理解力がつく

徳島・生物多様性博覧会の開催に向けた取り組み

とくしま会議では、活動の節目となった時に、次の方向性を見出し共有するためのWSを行ってきている。2012年3月に開催されたWSでは、「生物多様性という言葉の難しさ」、また、「生物多様性に関するイベントに参加する人たちの層の薄さ・広がりなさ」が課題として抽出され、とくしま戦略を推進していくためにはこれら課題の克服が必要だと考えられた。こうした検討の中から、

2012年5月のWSで、とくしま会議をハブとして、周辺の団体・機関・企業等を巻き込み、それらが一同に会して活動を報告しあい、共有できるようなイベントを実施しようとの提案がなされた。そして、そのイベントには、徳島市中心部に買い物に出かけてきた人たちを呼び込めるような、魅力ある企画が必要であるとの考えも示された。その提案を形にするために、とくしま会議内に実行委員会をたちあげ、検討が進められることとなった。

とくしま会議には、県内で生物多様性や環境保全に対しての想いが強い団体のほとんどが参加している。その中の閉じた場で繰り返される議論では、固有の概念の枠を超えることはできず、結局は新しい層を獲得できないままで終わってしまうとの考えも示された。そのため、実行委員会では、まちづくりプランナーや、コピーライター、デザイナーにも協力をよびかけ、異なった視点から生物多様性に係る概念を捉え、わかりやすく伝えていくためのアイデアを得ることとした。そして、環境防災研究センターに所属するまちづくり専門家をトータルコーディネータとしてイベント企画が練られ、また、デザイナーとコピーライターによるチラシの作成が行われた(図6)。現在、「徳島・生物多様性博覧会(以下、博覧会)」と名付けられたイベントの、2013年1月26日、27日の開催に向け、週1回のペースで実行委員会が開催され、急ピッチで準備が進められている。

博覧会は、とくしま会議、徳島県、徳島大学環

境防災研究センターの主催、とくしまマルシェ、とくしま環境県民会議、四国CBDネットワーク、四国EPO、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社の後援により、今のところ、とくしま会議を構成する22団体の他、小松島市生物多様性農業推進協議会、みなみから届ける環づくり会議、大塚製薬株式会社板野工場、日亜科学工業株式会社、貝の資料館・漁師さんの水族館モラスコむぎ、日和佐うみがめ博物館カレッタ、美郷ほたる館、徳島県立博物館、徳島県立佐那河内いきものふれあいの里ネイチャーセンター、徳島県立千年の森ふれあい館、徳島県立農林水産総合技術支援センター水産研究所、徳島県立文学書道館、あすたむらんど徳島、徳島大学薬学部附属薬用植物園、阿南工業高等専門学校等の参加を得て開催することになっている。そして、徳島県の山、里、川、海それぞれでの暮らしと生物多様性との関わりや、それらの場に関わりある団体の活動について、来場者がストーリー性をもって観られるよう展示物等が配置されるよう企画されている(図7)。また、27日には、会場近くで開催される「とくしまマルシェ」との連携によって、生物多様性に配慮した食材の購入や、食事を楽しめるよう調整が進められている<sup>4)</sup>。さらに、徳島大学の学生コーディネートによる「ひよこサイエンス・カフェ」の企画も進められていて、若手研究者と来場者との間での双方向コミュニケーションの場も設けられることになっている。

実行委員会のメンバーは、一つ一つの団体・組織を回って、企画の趣旨を説明し、参加を呼びかけている。そうした大変な努力と苦労を伴う“行脚”は、訪問した団体・組織に生物多様性の概念を伝え、気付きを与える過程でもある。そうした行脚によって、「とくしまマルシェ」では販売する農作物や特産物の評価に、生物多様性という軸が矛盾なく入ることにスタッフが気付いてくれた



図6. 「徳島・生物多様性博覧会」のチラシ(デザイン:藤本孝明氏, コピーライト;明丸節子氏).

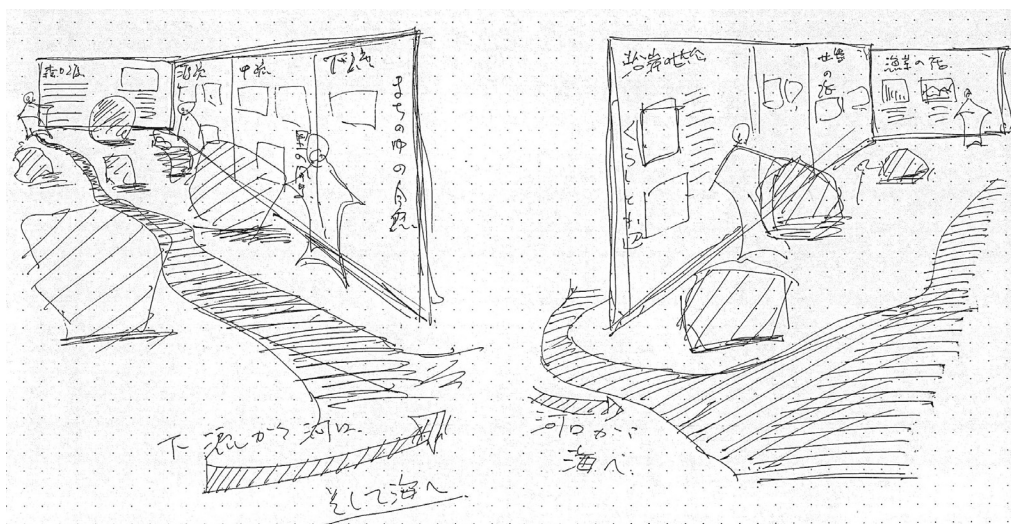


図7. 「徳島・生物多様性博覧会」の導線イメージ (デッサン; 田口太郎氏).

こと、「徳島県立文学書道館」では、本で表されている自然や生物の豊かさを伝えていく企画が提案されたこと、「あすたむらんど徳島」からのドングリを使ったフォトフレームづくり，“ちりめん”の中のモンスター探しといった企画の提案とスタッフの配置申し出が行われたこと等は、それぞれの団体・組織で、生物多様性の保全や持続的な活用に関する取り組みができることへの気付きが得られた証であろう。こうした気付きの広がり、活動の共有をとおした新たなつながりは、とくしま戦略を推進していくための礎となっていくはずである。

#### おわりに一協働の継続と発展に向けて

とくしま会議の構成メンバーは、それぞれに生業としての仕事を持ち、自らが属する団体の活動を行い、その上で、とくしま会議の活動に従事している。それは、皆がそれぞれに、徳島の自然やそこに暮らす生物、また、暮らしや文化に愛着を

持っていて、それを何としても将来に残していきたいと思っているからに他ならない。そうした熱意が活動の原点だ。

一方で、皆、いっぱいいっぱいの中で活動している。時には力がつきそうになり、とくしま会議への参加・活動に疑念が生じることもある。実際、2010年のとくしま会議の立ち上げ時、2011年の提案の提出後、また、TMの開催後は、メンバーのほとんどがくたびれ果て、次の行動目標を共有し、計画をたて、活動に移るまでには、しばらくの時間を要した。その過程では、先を見据えて、WSに定期的に足を運んでもらうための仕掛けを考え、呼びかけ続ける人が必要だった。また、具体的な活動を行なっていくための資金を得るための申請書作成を担当できる人も必要だった。

生物多様性の主流化は、生きもの好きの人が生きもの事を調べ続けるだけでは達成できない。繰り返しにはなるが、まずは、生きもの好きの人たちや地域の文化・風土に愛着を持っている人たちが継続的に集まれる場や、そこに集まってくる

ためのしくみを創りださなければならない。その場では、情報交換を促進するための工夫を行い、情報や目標の共有を行なっていくためのしくみを提案して合意形成を図り、互いの信頼関係を深めていくためのしかけを行っていくこと、また、人や企業等の組織を新たに巻き込んでいくためのしかけを考え、協働のあり方を提案していくことが必要だ。そして、このような協働のマネジメントを、継続的に行なっていく事務局が不可欠だ。

とくしま会議の中では、NPO活動も行なっているコンサルタント技術者や研究者が核となってマネジメントを担っているが、活動の多様化に従って仕事量も増大し、とくしま会議内の動きを始めとする情報整理さえも間に合わなくなってきた。

小委員会およびとくしま会議では、協働の継続、拡大、発展による生物多様性の主流化を目指していくために、協働のマネジメントや事務局機能を息長く担っていくことができる「生物多様性センター」の設置を、今、徳島県に提案している。そこには、「生きもの好きな人」を好きな人で、マネジメントやコーディネートに係る高いスキルを持つ人が配置される必要があるだろう。

2010年2月、財政危機に陥っている徳島県行政に任せていてもとくしま戦略の策定は進展しないとの認識が市民団体で共有されたことが起点となり、ボトムアップで創りだされてきた、3年になろうとする徳島での動き。ソーシャルキャピタルは間違いなく高められてきている。生物多様性の主流化に結びついていくのか、そして、社会イノベーションにつながるのか。今後の活動を継続的に支えていくための事務局体制やその資金など、

大きな課題が山積する中で、社会的目標の達成に向けて様々なセクター間で知恵を出しあいながら挑み続けることが必要である。

## 引用文献

鎌田磨人・新開善二・岸村憲作. 2011. 生物多様性COP10がもたらした市民グループのネットワーク化、「生物多様性ととくしま会議」の挑戦. BIO-City, 47: 80-85.

日本自然保護協会. 2012. 地域が輝く生物多様性戦略づくり-18の市民団体と研究者が連携, 知事にあてた提案づくり. 自然保護, 525: 7-9.

## 注釈

1) 「生物多様性地域戦略」は、「第五条 地方公共団体は、基本原則にのっとり、生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関し、国の施策に準じた施策及びその他のその地方公共団体の区域の自然的社会的条件に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する。第十三条 都道府県及び市町村は、生物多様性国家戦略を基本として、単独で又は共同して、当該都道府県又は市町村の区域内における生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関する基本的な計画（以下「生物多様性地域戦略」という。）を定めるよう努めなければならない」とする、「生物多様性基本法」に基づいて策定されるものである。

2) 2012年度以降、徳島県の組織改組によって自然環境課は自然環境室となった。しかし、本稿では、混乱を避けるため自然環境課の名称を使用する。

3) 「徳島県での生物多様性地域戦略策定に向けての提案」において検討すべき項目として示されたのは、以下の七つであった。①長期目標及び短期目標について、②数値目標について、③目標実現に向けた具体的な行動計画と施策について、④国・市町村・市民等との連携体制の構築について、⑤生物多様性保全を推進する人材の育成のあり方について、⑥情報の集積・共有・発信の仕組みについて、⑦地域戦略策定後のモニタリングの実施と進捗のチェックについて

4) 徳島のこだわりの農家が育てた、安全・安心・元気いっぱい野菜、フルーツ、特産品を消費者に届けようと、徳島市内の中心部を流れる新町川沿いのボードウォークで、毎月最終日曜日に開催されている生産者参加型のショッピングモール。URL: <http://tokushima-marche.jp/home/>